

ワークショップ型授業を通じた教員ネットワークの形成

谷口 和也

東北大学大学院教育学研究科

【要約】

本プロジェクトは、東北大学教育学研究科を中心とした教員ネットワークの形成を、ワークショップ型の授業講演会の企画運営を通して行うものである。大学が企画・主催する従来型の講演会においては、大学が県や市の教育委員会の後援を得て、教育委員会経由で学校現場に情報が流れ、参加者を送り込むというトップダウン形式が中心であった。これに対して本プロジェクトでは、教員や学生からの要求に対応し、教員の勉強会や学生のメーリング・リストなどの既存のネットワークを活用し、プロジェクトを進めるものである。その結果、次の三点が明らかになった。①学校やHP上での告知によって広報を行う従来型の方法は、ほとんど効果が見られなかった、②既存ネットワークの活用によってより安価で、より関心のある層への呼びかけが行われた、③本方式は、大学を中心とする継続的なネットワークが形成できるという利点があった。その反面、ボトムアップの意見集約の結果、講演内容や形式がやや幅広いものになってしまうという課題も生じることとなった。

キーワード：教員ネットワーク ワークショップ 開発教育

I. はじめに

本プロジェクトは、2007年度に行われた教育ネットワークセンタープロジェクト研究A「開発教育ワークショップ」を通じた教員ネットワーク形成」に引き続くものである。本プロジェクトは、本年度も同センターの補助を受け、宮城県の教員をはじめとする授業研究のグループと協力して講演会を企画・運営することで、教育学研究科を中心とした教員、学生および市民のネットワークを形成するというものである。

通常、大学から出された案内は、教育委員会→各学校→教務主任等→各個別教員というトップダウンで伝わる。これに対して、本プロジェクトでは、既存の複数のネットワーク・グループからのボトムアップという形式を採っている。特に、今回のプロジェクトでは、ボトムアップの形式をよりすすめるため、各講演会の企画段階から複数の中核ネットワークからの要望を受け付け、世話人に企画会議に参加していただいた。また、講演会の性格に合わせて、参加呼びかけ方法を重点化した。さらに、講演会の形式も、講演中心（第一回目）、ワークショップ中心（第二回目）、授業づくり体験中心（第三回目）と性格を変えて実施することとした。

II. ネットワークを利用した企画・立案

通常この種の大学運営の企画は、立案の段階では大学側が行い、その講演内容をさまざまな方法で周知するという方法をとっている。これに対して、本プロジェクトでは、講演の趣旨を説明した上で、講演の詳細な内容や希望する講師など、可能な限り多くの人びとに意見を求めるようにした。

本プロジェクトでは、すでに仙台市内で活動実績のある「みやぎ開発教育ネットワーク」および尚綱女子中・高等学校教諭陣、宮城県の国際理解教育研究会を中心に、「やまがたグローバル教育研究会」、「GEF（グローバル・エデュケーション・フォーラム）」、宮城県および福島県の国際交流協会などのメンバーとの協働で、教育学研究科内での企画・立案会議を行った。

企画・立案の通常の過程は、【図表1】のようになる。まず、各既存ネットワークのメーリング・リスト（以下、MLと略す。）に講演の趣旨とだいたいの日程を流し、公演内容や形式についての希望の集約、趣旨に沿った招聘講師の希望の集約、参加可能日時の集約などを行う。これに基づいて、各ネットワーク・グループの世話人とともに招聘講師および大まかなプログラムを決定する。この際には、直接対面して、大学側の趣旨説明と細かな要求のすり合わせが行われる。その後、各ネットワークの人脈を動員して協働しながら、教育学研究科からの講師派遣の交渉を行う。

講師、プログラムの詳細、日程が決定して後は、通常のチャンネルによる周知に加えて、本プロジェクトのMLから、プロジェクトに協力いただいた各ネットワーク・グループのML、さらに、そのネットワークに接点のある外部のMLへと情報を流すようにする。また、参加希望学生が学年ごとに作っている学生間の情報MLを活用し、学生の協力を依頼して、本プロジェクトの情報を周知するように努めた。

【図表1】 ネットワークを利用した企画・立案過程

ML	<ul style="list-style-type: none"> ・本プロジェクト ML→既存の複数の ML による招聘希望講師のアンケート。 ・本プロジェクト ML→既存の複数の ML による内容等に関するアンケート。
直接	<ul style="list-style-type: none"> ・講師決定および大まかなプログラム案の策定。
直接	<ul style="list-style-type: none"> ・講師依頼窓口教員および教育学研究科の協働による交渉。 ・教育学研究科からの依頼状発送。
ML	<ul style="list-style-type: none"> ・本プロジェクト ML→既存の複数の ML による参加者の呼びかけ。 ・既存の ML 参加者→その他の ML への呼びかけ。
直接	<ul style="list-style-type: none"> ・教育学部・教育学研究科の授業でのちらし配布。 ・大学内でのポスター掲示。
講演会当日	

Ⅲ. ワークショップ型講演会の開催

ネットワークを基盤として企画・立案を行った結果、今年度、本プロジェクトでは三人の講師をお招きして三回の講演会を行った。第一回目は、11月15日の山西優二氏、第二回目は、12月20日の中村絵乃氏、第三回目は、2月14日～15日の藤原孝章氏である。教育ネットワークセンターのプロジェクトの決定が7月初旬であり、さらに、そこからMLによる企画・立案の意見集約期間が必要なことから、第一回目は9～10月以降になる。今回は、講師の都合で、当初計画の10月実施より1ヶ月ずれ込んだプロジェクトのスタートとなった。

【第一回】

日 時：2008年11月15日（土曜日）午前10時～午後4時

場 所：文科系総合研究棟（東北大学教育学部）11階大会議室

講 師：早稲田大学教授・山西優二氏

テーマ：地域発の開発教育・国際理解教育の教材づくり

プログラムの詳細：

10:00～10:20	受付・開会行事・講師紹介
10:20～12:00	対話型講義「地域発の開発教育・国際理解教育の教材づくり」
12:00～13:00	昼休み・昼食
13:00～15:30	教材づくりワークショップ
15:30～16:00	ふりかえりと閉会行事
16:00～18:00	茶話会・交流会

講師としてお招きした山西優二氏は、早稲田大学文学学術院文化構想学部で社会構築論を専門とされている。氏は、『わかちあいの教育』¹や『これからの開発教育』²などの著書で、地域内における関係性の構築や参加の重視、地球規模の問題と身の回りの社会との相互補完的な関係性から環境や開発の問題などを見ていくことの重要性を主張されている。今回、地域社会に根ざした環境教育、グローバル教育について講演いただいた上で、宮城県や東北に根ざした教材の開発を指導していただくこととした。

山西氏からは、参加者に対して、「あらかじめ宮城県か東北においてのグローバルとローカルを関連付けるような素材を見つけ、できれば授業作りのための材料もつけておいてほしい」との要望が出された。

当日は、午前中は、パワーポイントでの講演を中心に、グローバルとローカルを関連付けた開発教育とは何かが話し合われ、山西氏が行っている開発教育の手法や、神奈川県逗子で行っている実践が報告された。山西氏は、逗子でNPO³を立ち上げて、地域や学校と一緒にこれらの実践を行っているということであった。

午後は、山西氏の指導のもと、各自が持ち寄った教材作りの材料をつきあわせ、三つの

グループに分かれて実際の授業作りワークショップが行われた。三つのグループから最終的に出された授業案は、「アウトレットモールの出店と地域の変化」「地域貨幣づくりによる地域経済活性化のシミュレーション」「すずめ踊りを通じた地域文化による国際的貢献」の三つであった。「アウトレットモールの出店と地域の変化」は、仙台商圏へのアウトレットモールの進出による地元の問題について検討させる授業で、渋滞や商店街の推移などの地域社会の変化から、グローバリゼーションの問題に一般化するものである。「地域貨幣づくりによる地域経済活性化のシミュレーション」も同様の問題を扱ってはいるが、反対に「地域貨幣」の流通によって、地域の独自性を維持するという考え方を、シミュレーションゲームを通じて体験させている。さらに、「すずめ踊りを通じた地域文化による国際的貢献」は、参加の小学校教員の取り組みから、地域文化を通じて国際交流の問題について考えさせるような授業であった。

その後、それぞれのグループの授業計画の発表と、講師による講評、終了後の交流会が行われた。

【第二回】

日 時：2008年12月20日（土曜日）午前9時～午後4時

場 所：東北大学マルチメディア棟

講 師：開発教育協会理事・中村絵乃氏

テーマ：対立から学ぼう！～誰もが過しやすい学びの場づくり

プログラムの詳細：

09:00～09:30	受付・開会行事・講師紹介
09:30～12:30	アイスブレイキング 講演会「アメリカのCR教育～誰もがピースメーカーになれる教育実践」 ワークショップ学習「対立から学ぼう！」
12:30～13:30	昼休み・昼食
13:30～15:30	ワークショップ学習「対立から学ぼう！」再開 ふりかえりと閉会行事
16:00～18:00	茶話会・交流会

第二回目の講師である開発教育協会理事の中村絵乃氏は、ML参加者および各ネットワークの参加者の中から最もリクエストの多かった講師であった。開発教育協会は、開発教育・グローバル教育にかかわるNPO法人で、グローバル教育の「すぐ使える」教材をたくさん開発し、出版している団体でもある。毎年、教員を対象とした全国大会では、数多くの授業作りの分科会を用意し、実際の授業体験や教材の紹介などを行っている。昨年の大会で最も参加教員の人気の高かった授業を行ったのが、今回招聘した中村絵乃氏であった。「中村先生の講演会の資料は、すぐに授業に使える」「中村先生の開発された教材は素晴らしい」「もう一度中山先生のワークショップを経験したい」。そんな東北各県の教員の

要望に応え、12月のぎりぎりのスケジュールであったが講演会を開催し、あわせて本学部学生に対しても周知を徹底した。

講演会は、二人一組の自己紹介、三人一組の今回の講演への期待などの話し合いというアイスブレイキングに引き続き、「やぶれたハート」のロールプレイが行われた。その後、アメリカで開発されたCR（Conflict Resolution＝対立解決）教育プログラムについて、パワーポイントによる報告があった。これは、小学校段階での対立や暴力解決プログラムで、講演方法は授業体験を交えた実際的なものであった⁴。その後、「ウィン・ウィン解決法」に関する授業では、エアコンのOn・Offを事例にして、ニーズや対立点を実際に探って解決方法を模索するというロール・プレイが行われた。参加者は、この事例に即して、モデル的に対立解消を行うプログラムを体験した。昼食後は、「怒りの体験」について参加者に想起させた後、さまざまな怒りや対立をモデリングし、日常生活で起きるさまざまな対立状況を三つのパターンにあわせ解決していくというロール・プレイが行われた。

今回は、講演会よりも実際のワークショップ型授業体験が中心であったため、教員志望の学生にも周知できるように、学内でのちらし配布に力を入れた。その結果、多くの学部生が参加した。

【第三回】

日 時：2009年2月14日（土曜日）午前10時～午後4時

場 所：文科系総合研究棟（東北大学教育学部）11階大会議室

講 師：同志社女子大学教授・藤原孝章氏

テーマ：シティズンシップを育てる教材づくり Part2

プログラムの詳細：

【2月14日】	
10:00～10:30	受付・開会行事・講師紹介
10:30～12:00	オリエンテーション 教材・学習プログラム・実践等の持ち寄り発表 数名の参加者から発表してもらい、実践紹介もしくは模擬授業体験。 発表されたものを参加者と討論し、講師からアドバイスをうける
12:00～13:00	昼休み・昼食
13:00～14:00	シミュレーション教材「ひょうたん島問題」の体験
14:00～14:20	休憩
14:20～16:00	シミュレーション教材「ひょうたん島問題」の体験
16:00～16:20	休憩
16:20～18:00	教材づくりワークショップ（現場教員・学生・市民による授業作り体験） 趣旨の確認とブレインストーミング
19:00～21:00	懇親会
【2月15日】	
09:00～09:15	受付
09:15～11:30	オリエンテーション 教材づくりワークショップ再開

11:30～12:00	作られた授業について各チームの中間発表
12:00～13:00	昼休み・昼食
13:00～14:00	教材づくりワークショップ再開
14:30～15:30	各チームによる授業の発表 ふりかえりと閉会行事

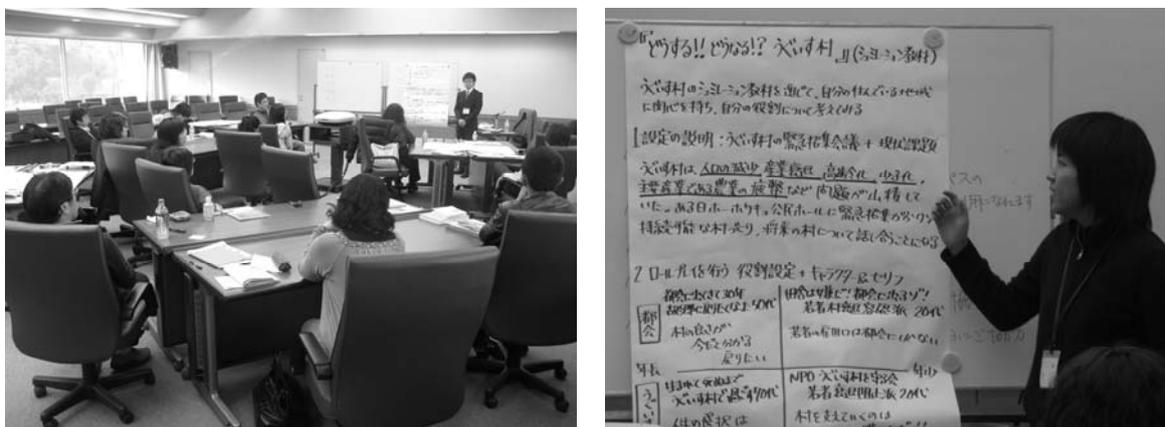
第三回目の講師は、同志社女子大学教授の藤原孝章氏で、二日間にわたる講演会となった。藤原氏は、グローバル教育に関する日本の第一人者である。氏には、昨年度も同様に本プロジェクトの講師をお願いした実績もある。昨年度は、新開発の「フェアトレードすごろく」の教材を、日本で初めて本プロジェクトで実践をいただいたが、今回は、10年にわたって改良を続けてこられた、氏の代表的シミュレーション教材「ひょうたん島問題」を中心とした講演会を行っていただいた。

毎年、この時期の講演会は一泊二日の合宿形式で行うことが多いが、今回、多くのネットワークに呼びかけたことで、宿泊形式の開催形式が困難となったため、二日にわたる通いの講演会プラス部分参加も可とする参加形式をとった。

第一日目は、参加者から、開発した教材や学習プログラムの報告がなされ、その成果を教員間で分かち合うという機会を持った。今回初参加の福島県の教員は、「マイクロ・クレジット」のシミュレーションゲームを披露し、開発途上国における経済開発や環境・文化などの問題を、すごろく風のシミュレーションゲームに作成したものを紹介した。さらに、宮城県教員からも他に2グループの発表があった。

午後からは、シミュレーション教材「ひょうたん島問題」の体験が行われた⁵⁾。シミュレーション教材「ひょうたん島問題」は、先進工業国「ひょうたん島」に、二つの異なる民族から労働者が移住し、さまざまな文化的な摩擦の中で社会的な問題を交渉していくというロール・プレイ・ゲームである。GIF 動画を多用したアニメ映像による状況説明の後、異文化間のあいさつ、それぞれの役割カードに基づく学校建設や多言語教育問題などのシミュレーションが行われ、参加者は実際にこれを体験した。

【図表2】授業作りの様子



休息後は、四つのグループに分かれた授業作りワークショップに移った。これは、教員、学生、市民がまざってグループに分かれ、講師のファシリテーションのもとで話し合いを進め、授業の構想を作っていくものである。各グループは、「格差社会」をテーマにした授業構想を行った。この授業作りは、二日間にわたって続けられ、最後にそれぞれが授業の中間構想を発表して、講師の講評をうけた。この授業作りは、二日間のプログラム内で完成することができず、現在も、本プログラムでグループとなった教員、学生、市民が相互に連絡を取りながら完成に向けて活動中である。

IV. ネットワーク形成の方法に関する考察

(1) プロジェクト参加者の属性

全三回にわたるワークショップ・講演会でのアンケートの結果、いくつかの注目すべき結果が出た。

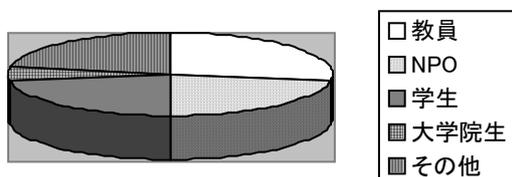
まず、本プロジェクト参加者の属性であるが、これは以下の【図表3～6】のようだった。第一回目は、通常のようにHP、協力校への案内、本プロジェクトML、各ネットワークML、ポスター掲示、チラシ配布をバランス良く行った。その結果、【図表3】のように、現場教員、関係NPO法人、学生、市民がほぼバランス良く参加することとなった。

第二回目は、ワークショップ授業の体験であることから、学内の教員志望学生に向けての周知に力を入れた。具体的には、学生間のMLの活用と、教職関係の授業の前後でのちらしの配布を行った。その結果、【図表4】の通り約半数が学部学生の参加となった。

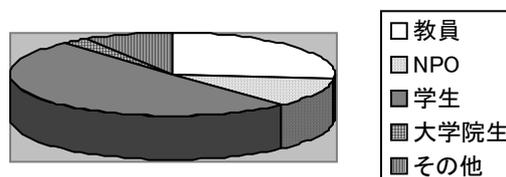
第三回目は、教材作りが中心であること、日程が春休みに入ったこと、二日間にわたる長時間であることなどから、学生の参加人数少なめで、教員が半数以上を占める会となった。それを示したものが【図表5】である。

全体を通してみると、【図表6】のように教員と学生が同数程度で、残りが市民や国際関係NPO法人のメンバーという結果となった。

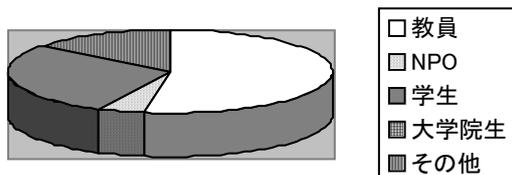
【図表3】第一回参加者内訳



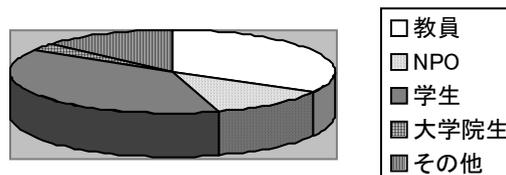
【図表4】第二回参加者内訳



【図表5】第三回参加者内訳



【図表6】参加者全体内訳



(2) ネットワーク形成に関する考察

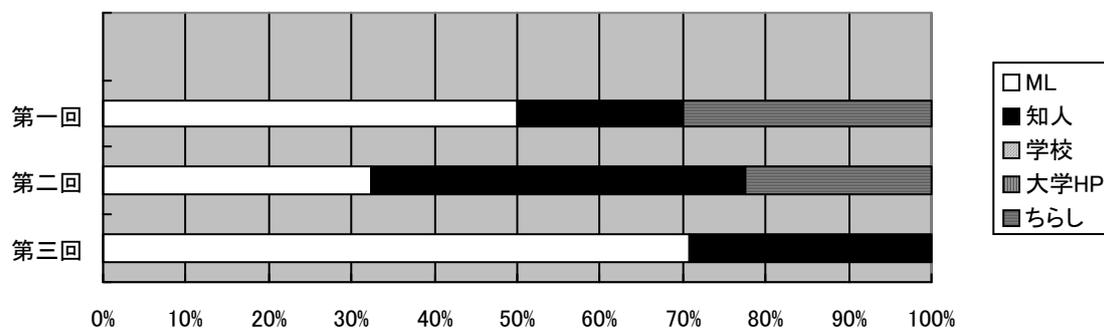
さらに、これらプロジェクト参加者に関して、どのような周知方法が有効であるかを調査したものが【図表7～8】である。

【図表7】は、参加者全員に、「どのような方法で本講演会のことをお知りになりましたか？」というアンケートの項目の結果である。第一回～第三回とも、ML、および知人からの情報であるというものが多かった。この結果から、本プロジェクトの目的のひとつであるボトムアップ型のネットワーク形成が充分になされたと考えられるよう。また、学生に向けて二週間前に複数の授業内で配布したちらしも、同様に効果が高かった。第三回目にちらしという回答がなかったのは、2月に入り、配布すべき授業がなかったためである。一方、通常この種の講演会で主流となるHPでの告知や学校への案内に関する回答は全くなかった。

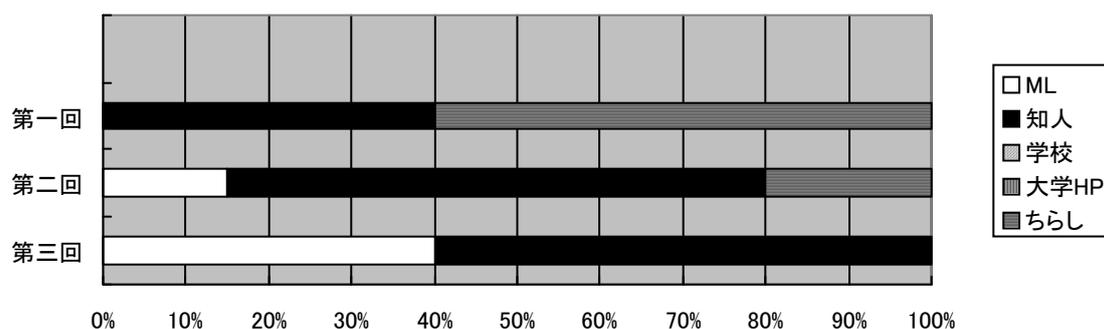
また、今回のプロジェクトで特徴的だったのは、初めての参加者が多かったという点である。第一回目の参加者の25.0%、第二回目の参加者の71.0%、第三回目の参加者の35.7%が初参加であった。これらの参加者が情報を得た方法についてみると、【図表8】のように、圧倒的に知人から直接情報を得たというものが多い。ちらしについても、「ご自由におとり下さい」的な方法ではなく、授業で教員が配ったものであることから、広い意味での「知人」として考えることができる。これらのことから、ネットワークの形成に関して、いかに従来型の方法に効果がなく、その一方で、草の根的な方法に効果があるかということが指摘できよう。

今後、大学が、どれぐらい継続的にネットワークグループとつながりを維持しているか

【図表7】講演会の情報を得た方法（参加者全体）



【図表8】講演会の情報を得た方法（初めての参加者）



が、大学が行うさまざまな社会貢献において成否を握る鍵となろう。

V. おわりに

(1) 本プロジェクトの成果

本プロジェクトの成果について、ワークショップ型授業講演会という観点と、教員ネットワーク形成という観点から論じたい。

第一のワークショップ型・参加型の講演会という点では、この種の講演会が、大学の事業として強く求められているという結果が出た。アンケート項目で、この種の講演会の必要性について解答を求めたところ、全アンケートの中で1名のみが「方向性を変えるべき」という回答であった。それ以外が、すべて「続けるべき」との回答であり、「続けるべきでない」との回答は0であった。「方向性を変えるべき」の1名に関していえば、講演重視の第一回目の会に対して「授業成果への具体的な講演内容」を求めるものであった。このことから、従来型の講演に加え、参加者が参加できる具体的な授業作りに即した講演会こそが求められているということがわかる。

第二に、教員ネットワーク形成ということに関して、公的なチャンネルは無視できないものの、日常的に活動している教員の諸ネットワークとの組織的な連携が、より効果的な大学の社会貢献、ネットワーク形成を生み出すのではないかという点である。今回のアンケート調査の結果からわかるように、参加者が情報を得て参加を決めた要因は、MLや知人の紹介などのいわゆる「口コミ」であった。特に、初めての参加者のほぼすべてが、これらどちらかの方法で参加を決めたことを考えると、ネットワークの裾野を広げようとする場合に、これら既存のネットワークを基盤とした「口コミ」の効果がいかに重要であるかわかる。なお、本プロジェクトへの参加者の10.6%が、これを機会に、教育学研究科の他の公演にも参加しているとの結果も出た。このことも鑑みると、教育学研究科を中心とする恒常的なネットワーク形成の取組みの必要が理解できよう。

これら二つの観点は、社会からの要求が非常に強いこと、実現の予算が従来の講演会やシンポジウムよりはるかに安価にできることなど、今後、大学の資源を効果的に活用し役立てていくために必要な方向性を指し示すのではないだろうか。

(2) 反省と今後の問題点

しかしながら、一方でいくつかの問題点も指摘できよう。

第一に、協働するネットワークの選択の問題である。今回のネットワーク形成においては、幸い信頼できるネットワークとの協働ができた。だが、今後、このような草の根的なネットワークとの協働が増大すると、公的チャンネルとは異なり、さまざまな立場のネットワークとの関係も生じてくる。その際、大学の社会的な責任とのバランスを考慮する必要が出てこよう。

第二に、企画・立案に関する問題である。今回も、企画・立案の段階から多くのネットワーク参加者の意見を集約することに努めた。このことは、一方で、参加者の多くが当事者意識を持ち、教育学研究科の企画を守り立ててくださるというメリットはあるものの、一方で、旗幟鮮明にプロジェクトの方針を貫くという点で弱くなることも否めない。今回は、何度か、実際に各ネットワークの世話人と話し合いを重ね、プロジェクトの基本方針の理解に努めたが、これも今後の課題として指摘できよう。

このような問題点はあるものの、多くの場合、活発に活動している教員の草の根的なネットワークと、教育ネットワークセンターが常に関係を維持していくことは、今後の大学の社会的な役割を鑑みた上でも、重要な意味を持つてくると思われる。

- ・本プロジェクトは、平成 20 年度教育ネットワークセンター支援事業「先端的プロジェクト型研究（A 型）」の支援を受けている。

1 岩間浩・山西優二『わかちあいの教育』近代文芸社、1996 年。

2 山西優二・上條直美・近藤牧子編『地域から描くこれからの開発教育』新評論、2008 年。

3 山西優二氏は、かながわ開発教育センター代表である。また、逗子市の教育委員も務めておられ、逗子市の小学校開放教育に携わっておられる。

4 中村氏の対立解消プログラムは、ウィリアム・クライドラー、ERIC 国際理解教育センター訳『対立から学ぼう～中等教育におけるカリキュラムと教え方』ERIC 国際センター、1997 年（原点：William J. Kreidler, *Conflict Resolution in the Middle School – A Curriculum and Teacher's Guide*, Educators for Social Responsibility, 1997）、ICCCR(International Center for Cooperative and Conflict Resolution)などの成果を基盤としている。

5 藤原孝章『シミュレーション教材「ひょうたん島問題」』明石書店、2008 年では、CD によるアニメーションつきで、本シミュレーション教材の完成版が観光されている。